『ゴルフと7人制ラグビーがオリンピック競技に正式決定』

10月10日の朝刊各紙にそのような言葉が躍った。

日本時間の同月9日夜、国際オリンピック委員会（IOC）の第121回総会がデンマーク・コペンハーゲンで開催され、ゴルフと7人制ラグビーが2016年リオデジャネイロ大会と2020年大会（開催地未定）の実施競技として正式に決まった。ゴルフとすれば、1904年セント・ルイス大会以来、実に112年ぶりのオリンピック競技への復帰になる。ゴルフがオリンピック競技になったことでゴルフ業界が盛り上がり、ゴルフの普及や発展など、全体的な底上げが期待できそうだ。

そこで本稿では、ゴルフがオリンピックでどのように競技されるのか、そして、オリンピック競技になったことで、どのような効果が期待できそうなのかをみていきたい。

また、これまでのゴルフとオリンピックの歴史について、本誌連載「これくらいは知っておこう～ゴルフ蘊蓄ばなし～」でお馴染みの大塚和徳氏にまとめて頂いた。

ゴルフ界が一体となり、五輪競技採用に向けて積極活動

ゴルフがオリンピック競技に決定されるまでの流れを簡単に振り返ると、まず、今年の6月15日にスイス・ローザンヌで行われたIOC理事会で、ゴルフ、7人制ラグビー、野球、ソフトボール、空手、スカッシュ、ローラースケートの最終候補7種目がそれぞれプレゼンテーションした。

それを受けたIOCは、8月13日に行われたドイツ・ベルリンでのIOC理事会で、その7種目の中からゴルフと7人制ラグビーの2種目を推薦することに決定。そして10月9日のIOC総会で、ゴルフが賛成63票、反対27票、7人制ラグビーが賛成81票、反対8票という過半数の賛成票を獲得したことで、2016年、2020年オリンピックの競技として正式に採用された。

ちなみにオリンピック憲章では、オリンピック競技の採用基準を「夏季では男子が4大陸75カ国以上、女子が3大陸40カ国以上、冬季では男女とも3大陸25カ国以上で広く行われている競技でなければならない」としている。ゴルフの場合、IGFがIOCへ提出した資料によると、120カ国、6000万人がプレーしているということなのでその基準を十分に満たしている。逆にその数字から考えると、これまで採用されなかったのが不思議なくらいだ。

実は、ゴルフをオリンピック競技に復活させる動きは、過去のオリンピック開催の際にも度々みられている。しかし、人種問題や性別問題、プロ団体との調整不足など、様々な事情により頓挫してきた経緯があった。そして今回、正式に決定されたわけだが、これまで失敗してきた推薦活動と決定的に違うのは、オリンピック競技に向けてプロ団体の協力を得られたことが大きな要因といえるだろう（ただ、今回のIOCの承認も、世界のベストプレーヤー＝プロの参加が絶対条件だったともいわれているが…）。

これまでプロ団体がオリンピックの参加へ難色を示していた理由として、スケジュール調整やスポンサー契約など様々な問題が障壁になっていたようだ。また、4大メジャー、ゴルフW杯、世界ゴルフ選手権といったグローバルな大会がすでに存在しており、選手らのオリンピックへの参加意識が低かったともいわれている。

しかし、今後のゴルフの普及や発展のためには、プロ団体を含む世界のゴルフ団体の団結が不可欠という認識が高まり、プロらも積極的な支援を表明し始めた。実際、6月15日のIOC理事会では、コリン・モンゴメリーやアニカ・ソレンスタム、そして日本女子プロ協会（LPGA）の樋口久子会長などが現地でプレゼンテーションし、さらには、ジャック・ニクラウスやタイガー・ウッズらトッププロたちがビデオレターで切々とゴルフの良さをアピールしている。

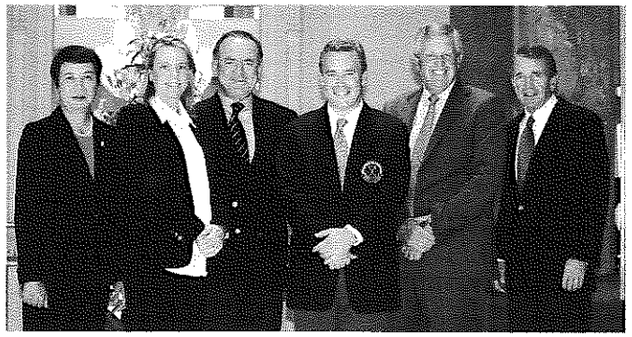
これまでは歩調の合っていなかったプロ団体とアマチュア団体だが、IOCへのゴルフの窓口であるIGFのメンバーに、R&Aの最高責任者ピーター・ドーソン氏とPGAツアーの副会長であるタイ・ボトウ氏が加わっていることからも、アマチュア団体とプロ団体が垣根を越え、オリンピック競技採用に本気で取り組んでいることが伺える。

このように、世界のゴルフ界が一体となり、ゴルフをオリンピック競技へ復活させることができたわけだが、7年後のオリンピックへ向け、国内の各団体ではどのような役割を担っていくのだろうか。

「日本オリンピック委員会（JOC）のメンバーである、我々日本ゴルフ協会（JGA）が国内の窓口になり、オリンピック関連の事業活動やプロ団体から派遣された選手団の編成を担います。JGAとしても、JOCやIGFと共に、オリンピックを契機としてゴルフの振興に努めていくつもりです」（岩上安孝JGA専務理事）

「IGFの中にはIGFオリンピックゴルフ委員会があり、その委員会のアドバイザーとして世界のプロ団体が協力する構造になっています。選手の派遣に関しては各プロ団体が行い、日本であれば、JGTOやLPGAがJGAと連携して選考、派遣する形になると思います」（日本ゴルフツアー機構山中博史専務理事）

オリンピックに向けて動き出したゴルフ界だが、今後は団体間で協議を重ねながら意思の疎通をはかり、足並みを揃えていくことが重要になるだろう。


左から、樋口久子（JLPGA会長）、アニカ・ソレンスタム、ピーター・ドーソン（R&A最高責任者）、タイ・ボトウ（PGAツアー副会長）、コリン・モンゴメリー、ティム・フィンチャム（PGAツアー会長）、6/15スイス・ローザンヌにて
写真提供：平山伸子氏

現状とこれからの課題 五輪でゴルフ界を盛り上げる

では次に、これまでにわかっている競技内容をみていきたい。ただし、現時点ではIGFの提案事項であり、それをベースにIGFとIOCが協議し、精査しながら具体的な競技概要を決定していくと思われる。

競技方法については、男女各60人が4日間72ホールのストロークプレーで競い、1～3位で同スコアになった場合は、それぞれ3ホールのプレーオフによって金、銀、銅メダルが確定する。また、競技は個人戦のみで団体戦は実施されないという。これらの競技内容について山中氏は、「IOCとしては、4大メジャーやゴルフW杯とは違った競技方法で、世界のトッププレーヤーが集う世界大会にしたいという考えがあり、そういったところに落とし所をもっていくのではないか」とみている。

確かに、既存の世界大会と同じ競技方法にしたところで目新しさはなく、競技としての価値を見出しにくくなるのは間違いない。今後IOCには、大人から子供まで、誰が観てもエキサイトできるような、オリンピックでしかみられない競技方法の確立を期待したいところだ。

JGTO
山中博史専務理事

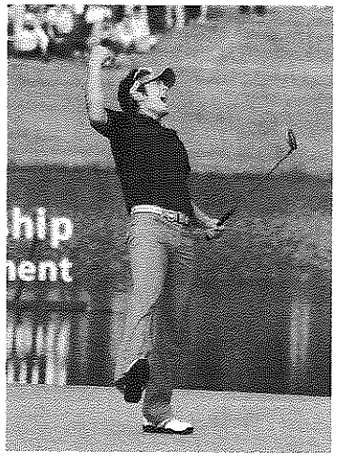
選手選考については、ワールドゴルフランキングの上位15名が自動的に出場でき、残りの45名は、上位15名の中に2名以上いない国・地域から最大2名が選ばれる。簡単に説明すると、例えば上位15名の中にアメリカ人が5名いた場合、残りの45名の中からアメリカ人が選ばれることはなく、その他の国・地域の選手へ繰り上げになるというものだ。

ただ、この選考方法のままでいくとすれば、国やエリアによる出場枠ではなく、予選会もないため、サッカーやバレーのような予選段階での盛り上がりに欠けてしまいそうな気がしてならない。さらには、男女のランキング上位を占めるアメリカや韓国を筆頭に、ゴルフ先進国の選手に出場の権利が偏ってしまう恐れもでてくる。

「現時点のランキングでシミュレーションすると、五大陸32カ国の顔ぶれになっています。もちろん上位15名の中に一つの国の選手が多くいれば、一人しか出られない国も出てきます。ただIOCでは、このランキングをベースに国際色豊かなベストメンバーの選考を望んでいますし、今後は、予選会やアマチュア枠などについても協議されるのではないかと思います」(山中氏)

せっかくゴルフがオリンピック競技になったので、アマチュアを含め、少しでも多くのゴルファーがオリンピックを目指せるような仕組みになれば、ゴルフの普及と発展に大きく前進していくはずだ。またそれは、ジュニアの育成にも通じるもので、将来、小学校の卒業文集に「20歳でオリンピックの金メダルを獲る」という夢を語る子供たちが出てくることを期待したい。

これらのように、まだ何も正式に決まっていないのが現状で、唯一、現時点で正式決定していることは、2016年にリオデジャネイロでゴルフ競技が開催されるということぐらいだろう。ただ、そのリオデジャネイロも、同市内には競技用のゴルフ場がほとんどないといい、選手の宿泊施設を含め、インフラ整備が優先事項になっているようだ。競技場などインフラ整備の問題は、これまでのオリンピック開催ではいつもクローズアップされ、ある意味、風物詩になっている感もある。そうした中で、ある著名なアメリカ人設計家が新設コースを造るといった話も持ち上がっており、ゴルフ業界も徐々に盛り上がりをみせ始めているようだ。


オリンピックでも遼君旋風を巻き起こすことができるか
写真提供：㈳日本ゴルフツアー機構

ゴルフがオリンピック競技になることで山中氏は、「間違いなくゴルフへの見方が変わってくるでしょう。ゴルフ後進国では政府の支援を受けることができ、それによって教育プログラムなどが確立されれば、次世代を担う子ども達がゴルフに出会う可能性が高くなります。国内では、政府の支援、税金問題、スポンサーのゴルフに対するイメージなど、ゴルフに対する認知度や見方が良い方向に進むのではないでしょうか」と指摘する。

国内は今、〝空前〟のゴルフブームに沸いている。その火付け役の石川遼や宮里藍らは、7年後には脂の乗った年齢を迎え、金メダルも夢ではないだろう。彼ら彼女らの活躍が現在のゴルフ産業を支えているといっても過言ではなく、さらなるゴルフの普及と発展のため、オリンピックでの活躍に今から期待がかかる。

兎にも角にも、7年後のオリンピックに向けて、IOCは誰もが納得できるルールを構築し、ブラジル政府には無事にオリンピックを開催できるよう整備に努めてもらいたい。オリンピックは、間違いなくゴルフ業界に好影響を及ぼしてくれるはずだ。

なお、早速来年1月15日の『2010年ゴルフ新年会』では、オリンピックを大きな追い風にし、今後のゴルフの振興と発展を目指すことをテーマに「祝・ゴルフがオリンピックに決定～ゴルフの未来を考える～」と題したトークセッションを開催するという。今後ゴルフ業界では、オリンピックに向けて徐々に盛り上がりをみせていきそうだ。

では最後に、大塚氏にゴルフとオリンピックの歴史についてまとめて頂いた。

◆「オリンピックとゴルフ」
ゴルフ史家　大塚　和徳

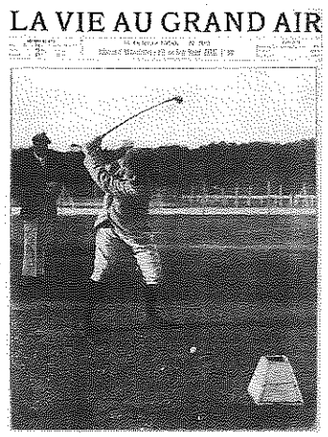
近代オリンピックはクーベルタン男爵の発案で1896年にギリシャのアテネで誕生した。この第1回大会では、アテネにゴルフコースがなかったこともあって、ゴルフは競技種目から外されていた。しかし、次の1900年パリ大会では加えられ、ポンピーニュの森にあったコースを使って行われた。

男子部門は2ラウンドのストロークプレー、12人が参加した。結果はアメリカのセント・アンドリュースGC会員のチャールズ・サンズが82、85のスコアで回り、スコットランド人ウォルター・サザーランドを1打差で抑えて優勝した。女子部門は9ホールのプレー、シカゴGCのマーガレット・アボットが47で金メダルに輝いた。また、男子のハンディキャップ競技では、アメリカのセント・ルイスから、たまたま商用で来ていたハンディ10のアルバート・ランバードが大会を知らされて参加、結果は驚きの優勝だった。国家を背負った現在の大会からは如何にも程遠い。

続く1904年セント・ルイス大会でもゴルフは行われた。前大会で幸運な優勝を遂げたランバートは、帰国後、グレン・エコーCCを所有する義父にパリでの成果を説明した。二人は直ぐに準備を始め、4年後のゴルフ会場をグレン・エコーに誘致、同時に競技責任者に収まった。アメリカでは全米ゴルフ協会（USGA）発足から約10年、ゴルフ熱は大いに盛り上がっていた。アメリカ人参加者は74人に達し、カナダ人も3人加わった。

個人戦はマッチプレー、団体戦は10人一組で36ホールのストロークプレーだった。団体戦の参加はアメリカの3チーム、ウェスタンGA（ゴルフ・アソシエーション）、トランス・ミシシッピGA、それに急遽かき集めたUSGA代表で、前評判通りにウェスタンが優勝した。

個人戦は、1904年から全米アマを2連覇したハーバード大の学生チャンドー・イーガンの全盛期で、彼が本命だった。しかし、46歳のカナダ人ジョージ・ライアン（1906年全米アマ準優勝、カナダ選手権8回制覇）が、雨と寒さに耐え、若いイーガンを破って優勝した。この大会も国を代表す



1900年パリ大会では米国人のチャールズ・サンズが優勝した
写真提供：市村操一氏

米国人女性初のオリンピック金メダリストになったマーガレット・アボット（1900年パリ大会）
写真提供：市村操一氏

る個人やチームの戦いではなく、アメリカのゴルフ大会にカナダ人3人が特別参加したようなものだった。

続く1908年ロンドン大会では、オリンピック委員会は、ドーバー海峡の3つのリンクス、ロイヤル・セント・ジョーンズGCのサンドイッチ、ロイヤル・シンク・ポーツGCのディール、プリンシズGCを使う案で準備に入った。ここでゴルフの総本山R&Aから「待った」がかかった。R&Aの実力者、ゴルフ規則委員長ジョン・ロー（『戦略型設計』の理論を確立した人物でもある）が、「何も知らされていない」を理由に、「ゴルフはオリンピックには向かないゲーム、もし加えるとしても、ゴルフはR&Aが管理する」と横槍を入れた。

1904年セント・ルイス大会の優勝者ジョージ・ライアン（カナダ）
写真提供：市村操一氏

また日程的に、サンドイッチで行われる「セント・ジョーンズ・カップ」、伝統ある「イングラント対スコットランド対抗戦」、最も重要な「全英アマ」に近すぎることも問題となった。さらに、英国からイングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドが独自の代表を出せるようオリンピック委員会が苦慮した「各国から4チームまで可」という案にも、「小国ベルギーが4チームで、ゴルフの故郷スコットランドが何で1チームなのか」という文句がでた。結局、イギリスの不参加から話は崩れ、エントリーは前回の個人優勝カナダ人のライアンのみ。ゴルフは開催されなかった。委員会はライアンに金メダルの授与を提示したが、ライアンはこれを断った。ゴルフの本場でのほろ苦い経験であった。

1936年ベルリン大会では、ゴルフは正式競技種目には入っていなかったが、大会の付属競技として、バーデン・バーデンのゴルフコースで国別対抗戦を行い、ヨーロッパの7カ国が参加した。独裁者アドルフ・ヒットラーの絶頂期で、オリンピックは国威発揚の場とされ、ゴルフ大会にも自ずから優勝杯を寄贈した。各国代表2名で1日2ラウンド、2日間の競技（全8ラウンドの合計ストロークで競った）だった。

大会2日目午前のラウンド終了時点でドイツチームが首位、報告を受けたヒットラーは優勝杯を自ずから手渡すべく会場に向かった。しかし、アーノルド・ベントリーとトニー・サークスの英国代表2人が奮闘、午後のラウンドでドイツを抜いて優勝した。途中でこれを知ったヒットラーは車を返してベルリンへ戻ったという。ベントリーが所属したランカシャーのヘスケスGCには「ベントリー・ルーム」があり、優勝杯と優勝メダルが飾られている。また、記念に植樹されたモミの木は「ヒットラーツリー」と呼ばれ、ハウス脇に高くそびえている。

その後もゴルフはオリンピックの競技種目に入っていない。

1996年アトランタ大会を前にした1992年10月、マスターズ・トーナメント開催で有名なオーガスタ・ナショナルGCで記者会見が行われた。オーガスタ・ナショナルGC理事長ジャック・スティーブンスとアトランタ・オリンピック委員長ビリー・ペインの二人は「このオリンピックを特別なものにするため、競技種目にゴルフを加え、オーガスタのコースを会場に提供する」と提案した。

ゴルフ界では〝大変な決断〟と驚いたが、アトランタ市議会の反応は冷たく、「1930年代初頭の開場以来、人種差別と女性差別の権化だったクラブが、オリンピックを通して、何の差別もないかのような姿をテレビで世界に紹介しようとは、何と浅ましい考えか」というものだった。ここでもオリンピックのゴルフは実現しなかった。オーガスタ・ナショナルから離れても、この時点では、未だゴルフは閉鎖性を伴う特権階級そのもので、大衆的なスポーツとは捉えられていなかった。

そして2016年リオデジャネイロ大会で、やっとゴルフが競技種目に加えられた。過去2回の大会での参加者は、前述のように、国を代表する個人や団体とは違う。それ故、今回のオリンピック加入は、復活ではなく新規加入といった方が正しい。

ゴルフのオリンピック加入をゴルフ界は大歓迎している。USGAの技術ディレクターも務めたフランク・トーマスは、ゴルフが他のスポーツに比べ、フィジカル、メンタル両面で最もバランスのとれたゲームと認識し、5つの観点から高く評価している。即ち、①オリンピックの娯楽的な側面が強まること、②ゴルフが世界中により広く知れ渡ること、③人種や性別に関係なく広い層が参加できること、④個人よりどの国がベスト・チームを持っているかが競われること、⑤政府の資金援助も付いて国際性が強まり、特に発展途上国での発展が期待されること、を挙げている。この見方は正しいといえよう。

バーデン・バーデンでの表彰式の様子と優勝記念プレート
写真提供：大塚和徳氏

1990年代、R&Aはオリンピック参入に消極的だった。全英オープン、全米オープン、マスターズ、全米プロの4大メジャーがあり、毎年チャンピオンが決まる。国別対抗戦のワールド・カップもある。これ以上新しい国際競技の追加は必要ないと考えた。しかし、21世紀に入って、ゴルフの一層の大衆化、ゴルファー層の更なる拡大という観点からオリンピック参入に積極的となった。

今回の結果はR&AとUSGAを中心としたゴルフ界全体の共同成果である。ただ、どんな競技方法となるのか、4年毎の大会というだけでなくオリンピックの特徴を何処に求めるのか。どんな答えが出るか興味深い。

資料提供：市村操一氏（東京成徳大学教授）、平山伸子氏（JGA国際委員広報委員）、大塚和徳氏（ゴルフ史家）